

モスクワにも戻れず、結局1週間もスフミ滞在を余儀なくされてしまったことを皮肉った1行15名の“合言葉”だったのである。しかも、このお別れパーティの日より2日前の8月17日ここスフミと避寒地＝保養地として著名なソチとの中間にあるリッチヤ湖を訪れたときも、恰も十和田湖を小さくしたような錯覚に何度もおそわれたことを思い出す。標高1,500～1,600米、リッチヤ湖の水深は160米とかで、部分的に万年雪を残す山々にかこまれたこの湖に至る山道は、われわれが「みちのく」の旅のつれづれを慰めてくれる、ありふれた風景と何等変るところがなかった。スフミの街には朝顔や夾竹桃が咲き、西瓜や茄子をもった人々がゆきかい、スフミ植物園には、日本や中国からの松・竹・サルスベリ・蓮・杉といったように、変哲はないが、日本でも普通みかける樹木が成育していたのである。

そもそも「東洋的」なものとは何であろうか。風土か、自然条件か、人間の顔かたちで、皮膚の色で区別できるものなのか？ 日本を離れるまでは夢想だにしなかった問題が前面にたちだかってきたのである。逆にいえば、「ヨーロッパ」、「西ヨーロッパ」とは何か？

われわれの旅は、偶然にもイギリス・ロンドンの旅から始まっていた。日本からJALで9時間、つまり、昨年7月28日午前10時15分に羽田を発ち、(モスクワ時間)14時04分にモスクワ・シエレメチエボ空港到着、そこでの1時間の休憩中に、余り旨くないビールを邦貨200円で飲み、さらに15時25分モスクワ発、大西洋を飛んで、(ロンドン時間)16時50分にロンドン・ヒースロー空港に到着したのである。(未完)

＜研究業績＞

前号以後の所員の業績は次のとおり。

〔著書〕

玉垣良典 『日本資本主義構造分析序説』日本評論社 1971・5

ジャン・ロム著 木崎喜代治訳 『権力の座について大ブルジョアジー』岩波書店 1971・9

ハワード・J・シャーマン著 玉垣良典・吉家清治・平川東亜訳 『寡占経済と景気循環』新評論社 1971・10

江沢譲爾 『近代経済学の論理』日本評論社 1971・3

正村公宏編 『技術革新』〔現代経済7〕筑摩書房 1971・7

同上 『知識産業論』中央経済社 1971・7

中村秀一郎他編著 『現代の化学工業』東洋経済新報社 1971・8

池田博行 『交通資本の論理』シネルヴァ書房 1971・4

内田義彦 『社会認識の歩み』（岩波新書）1971・9

〔論文〕

加藤佑治 「転期にたつ日本の雇用失業政策」（『賃金と社会保障』1971・5下旬号）

同上 「新経済社会発展計画と労働力政策の現段階」（『経済』1971・8月号）

三輪芳郎 「鉄鋼業」（宮下武平編『日本産業論』有斐閣双書 1971・9）

宮田三郎 「市民的法治国問題について」（専修大学社会科学研究所『社会科学年報』5号
1971）

隅野隆徳 「ロシア革命と憲法—1905年革命を中心にした予備的考察—」（同上）

打田駿一 「恐慌とモラトリアム」（同上）

加藤幸三郎 「日本帝国主義の形成と三井財閥」（同上）

梅井義雄 「三井物産における山本条太郎と森恪—その中国での活動を中心に—」（同上）

西岡幸泰 「SEDのヴァイマル期労働運動史論」（同上）

勝本正晃・打田駿一・泉久雄 「危機の時代の経済と法—欧州大戦後の民法研究を中心に—」
（同上）

石渡貞雄 「『帝国主義論』における基本問題」（同上）

佐々木享 「わが国の初期鉱業労働保護立法について—鉱業条例の鉱夫保護規定に関する覚書—」
（同上）

殿村晋一 「戦前期中小商業問題にかんする一考察」（同上）

吉家清次 「高橋七五三著『経済学序説』」（同上）

玉垣良典 正村公宏 「国家独占資本主義論争—その背景と評価をめぐって—」（『現代の理
論』 33）

正村公宏 「産業発展の転換と経済体制」（『経済評論』 19—13）

正村公宏 「われわれにとって社会主義とは何か—現代における社会主義者の立場と方法につ
いて」（『平和経済』 114）

三輪芳郎 「耐久消費財産業の成長屈折点」（『経済評論』 20—11）

正村公宏 「体制選択の論理構造」（『中央公論』 86—3）

蔵下勝行 「公益企業のPricing および投資政策に関する一考察」（『専修経営学論集』
6）

志村嘉一 「日本における優先株発行」（同上）

- 宮崎犀一 「イギリスにおける経済学史研究—1946—1969」(『経済学論纂』 11—1/2)
- 望月清司 「ドイツ・イデオロギ—その市民社会論と歴史認識」(『現代の理論』 88)
- 森田桐郎 「ジェームズ・ミル評注(上)」(『現代の理論』 88)
- 中村秀一郎 「新しい中小企業政策の方向—二重構造の改良よりは消滅を」(『エコノミスト』
49—16)
- 江沢譲爾 「統一科学から見たマックス・ヴェーバーの方法論」(『専修経済学論集』 6—
1)
- 森下健三 「財政政策と経済成長」(同上)
- 坂牧三郎 「鉱業飯場制度の技術的基礎」(同上)
- 平川東亜 「ケインズ派動学の方法について」(同上)
- 吉家清次 「パオロ・シロスニラビーニ著『寡占と技術進歩』・改訂版」(同上)
- 正村公宏 「日本経済の成長は屈折するか?」(『経済月報』[静岡経研] 9—6)
- 三輪芳郎他 「戦後日本技術の再評価」(1—2)(『経済評論』20—5・6)
- 森田桐郎他 「経済学・哲学草稿<第3草稿>[マルクス・コンメンタール 4—2] <シン
ポジウム>」(『現代の理論』 90)
- 三輪芳郎他 「戦後日本技術の再評価(3)—横河電機」(『経済評論』 20—7)
- 正村公宏 「世界資本主義と『日本の企業集団』」(『経済評論』 20—7)
- 志村嘉一 「金融再編成と企業集団」(『経済評論』 20—7)
- 小林義雄 「文革後の中国経済の発展方向(上)」(『経済評論』 26—8)
- 三輪芳郎他 「戦後日本技術の再評価(4)—本田技研」(『経済評論』 26—8)
- 玉城 哲 「灌漑農業の地代構造[付・コメント]」(『日本の農業』 76)
- 三輪芳郎 「日本の機械工業発展の現状」(『専修経済学論集』 6—2)
- 泉 武夫 「1910年代における日本綿糸紡績業の展開—特にその独占転化に関して—」(同上)
- 木崎喜代治 「G・アルゲン『租税の社会学的理論』」(同上)

〔 所 報 〕

○ 第17回定例所員総会 [1971年6月19日, 午後1時半より, 神田校舎第2会議室]

1) 報 告

- a) 事務局一般報告
- b) 各部(会計・編集資料・研究会)報告

- c) 新特定研究「産業構造変革」の研究活動報告
- d) 旧特定研究「日本近代化」(新発足の「帝国主義研究会」の研究状況も含む)の成果
とりまとめを中心とした研究活動報告

2) 議 題

- a) 昭和45年度決算報告案ならびに平館利雄所員監査結果報告について
 - b) 昭和46年度研究活動計画案ならびに同46年度実行予算案について
- 以上の諸案については、慎重に審議の結果、原案通り承認された。

- 3) 新しく所員に江口英一氏(本学兼任講師, 中央大学教授)を委嘱した旨, 所長より報告があり, 承認された。

- 7月1日, 本『社会科学年報』第5号を全国の研究機関ならびに研究者宛発送。
- 合宿研究会(昭和46年7月3日~4日, 神田一橋寮にて, 特定研究『産構研』と共催)

1) 個別報告

- a) 木崎喜代治「ルソーをめぐる二、三の問題」
- b) 坂牧三郎 「鉱業飯場制度の技術的基礎について」
- c) 泉 武夫「『在華紡』の発展について」
- d) 西岡幸泰「1960年代の日本社会保障の転変」

- 2) シンポジウム: 隅野隆徳「最近における司法問題」, 打田駿一「裁判・裁判官・裁判所の諸問題」

を中心に, 二日間にわたり積極的かつ活潑な討論が重ねられた。

- 社研事務局会議 [1971年9月21日, 午前12時15分より, 生田図書館5階集会室]

1) 今後の社研の研究活動について

- a) 特定研究『産業構造変革』の第二年度の研究進捗状況
- b) 編集関係: 『社会科学年報』第6号の執筆状況ならびに『社研月報』編集(とくに「100号記念号」ほか)状況
- c) 研究会の開催予定のスケジュールについて

- 社研定例研究会(1971年9月28日, 午後2時半より, 生田図書館三階視聴覚室)

今年6月末から8月にかけて欧亜の灌漑農業を調査された玉城 哲所員の貴重にして興味あるスライド映写を含めて研究報告をしていただいた(「アジア農業の印象——地中海からモンスーン・アジアまで——」を参照[「社研月報」16, 98所収])。

『社会科学年報』第6号 <予告> 未来社 1972年3月刊行予定

目 次

<論 文>

帝政ロシア交通政策と財政問題	池 田 博 行
財政論史におけるモンテスキュー	木 崎 喜代治
未完の同盟とそのジレンマ——戦後日米関係の一考察——	山 本 満
満州事変と三井財閥——山本条太郎・森恪との関係を中心に——	梅 井 義 雄

<研究動向>

警察と秩序——問題意識再考の旅——	福 島 新 吾
本邦綿糸紡績業研究の最近の動向をめぐって	加 藤 幸三郎
——長岡・高村両氏の原著によせて——	

<書 評>

江沢譲爾著『近代経済学の論理』	蔵 下 勝 行
正村公宏著『知識産業論』	壹 岐 晃 才

<編 集 後 記>

沖縄問題をおしのけて予算の問題が新聞紙面をうづめるようになりました。大蔵大臣は例の語呂アワセでヨナオシ予算と自賛していますが、穏やかな大新聞さえ、「水ブクレ予算」という名前を用いています。公債発行と公共料金引き上げを伴っているさいきんの財政措置をみていますと、「あとは野となれ山となれ」ということばを思いだします。日本の政治には、もはや明瞭な未来への展望も、その展望へむけた主体的な決断もないのです。戦後、これほど政治が摩耗したことはありません。政治への不信がこれほど深化したことはありません。無為と無責任がこれほど政治の核心にまでしみわたったことがないからです。いま大臣はヨナオシといっています。然り、ヨナオシとは元来、革命的暴動のやまとことば的表現であります。 (Q)

神奈川県川崎市生田 4764

専修大学社会科学研究所 電話 (044) 91-7131 [内線 63]

(発行者) 江 沢 譲 爾